

学習者中心型の英語教育を取り入れたパラグラフィティング指導の実践

加 藤 澄 恵

1. 研究の背景と目的

2003年文部科学省が、「英語が使える日本人」の育成のための行動計画を打ち出して久しい。これは、大学教育においては英語教育を終えると仕事で英語が使えるという目標が含まれる。仕事で英語が使えるというのは、具体的にはどのような力で、また、それはどのような教育方法で育成が可能なのであろうか。仕事で英語が使えるというのは、英語で商談が出来る、英語でプレゼンテーションが出来る、英文ビジネス文書が書けるということである。今般、ブログやメールの発達により、『書く』ことが現在社会において重要な位置づけとされ、『書く力』を求められている。本研究では『書く』ということに焦点をあて、学習者のライティング力向上を教授法の観点から調査した。つまり授業形態が外国語学習者のライティング能力に与える影響についてを検討する。具体的には、学習者中心の英語授業形態が学生の英語ライティング能力向上に与える影響についてを調査した。調査では、ライティングの授業に好意的に得意だとアンケートで答えた学生とそうでない学生にわけ両者の学習者中心への教授法の影響を調査した。大井（2008b）は、「書くこと」は、学習者の「考える力」を高める「知的訓練」であり、また、習得の途上にある英語学習者にとっては、他の技能（「読む」「話す」「聞く」）の上達にも大きく寄与する力と指摘する。具体的には、検証1学習者中心のパラグラフィティング英語授業形態への学生の関心の調査、検証2ライティング授業が好きな学生とそうでない学生にわけ、両者の学習者中心への教授法の影響を調査した。もし、学生の学習者中心の英語授業形態の関心などが明らかになれば、教師が学習者に対して、ライティング授業のあり方を構築できると考えられる。

2. パラグラフィティング指導と学習者中心の教授法

パラグラフとは、「書き手が主張したい1つのアイデアについてその主張がはっきりするように論理的展開によってサポートすること」であり、これははっきりとした定義や構成概念のない日本語の「段落」とは同じものではない。パラグラフの構成は、トピックセンテンス、サポーティングセンテンス、コンクルーディングセンテンスからなるものであり、一つのパラグラフの中では書き手の主張が読み手に対して説得力を持つように、議論を展開していかななくてはならない。（大井，2008b）大井（2008b）は、パラグラフィティングの指導を通じて他の認知スキルを強化する活動であると主張する。認知スキルの一つとして論理的思考能力が挙げられ、書き手は「問題解決を図る」ために「筋道を立てて（論理的に）考える」ことが求められ、学習者は知らず知らずにこの能力を強化していると言える。

学習者中心型教授法とは、1960年代に従来の教師が指導権を持つ教師中心型教授法に不満を持った教師・教育者の中から生まれた。学習者中心型教授法の概念は、Humanistic

Approach, Communicative Language Teaching, Learner Strategies の研究成果によって提示されたものである。Humanistic Approach（人間中心主義の言語教育）は、学習者中心型言語教育に大きく影響を与え、その理念とは、1. 言語指導を学習者個人に合わせることで、それにより言語記号体系そのものの指導より、学習者が望む伝達する力を養成する、2. 言語習得プロセスの重要性、すなわち学習者の学習参加を重要とすることを挙げている。（Tudor 1996, p6）

学習者中心型の授業形態の特徴とは、activity organization, learner autonomy, and the course design perspective on learner-centeredness の3つであるが、本稿では、activity organization と learner autonomy に焦点をあて、the course design perspective on learner-centeredness は触れないこととする。

Illich（1972）は、以下のように学習参加は言語習得にあたり重要であると示している。

In fact, learning is the human activity which least needs manipulation by others. Most learning is not the result of instruction. It is rather the result of unhampered participation in a meaningful setting. Most people learn best by being ‘with it’, yet school makes them identify their personal cognitive growth with elaborate planning and manipulation. (Illich 1971, p44)

日本における学習者中心型を取り入れたパラグラフィティング指導の研究は少なく、ここでは学習者中心型を取り入れた英語教育全般の効率を検証していく。学習者中心型は「グループによる学習」を学習形態とし、学習者が能動的に学習に参加することで学習効果が期待できるといわれている。また、「グループによる学習」は、「リラックスした雰囲気学べる」と先行研究から示唆され、学習効果が期待できるとしている。アラン、平木（2001）によると、伝統的な教員中心型（teacher-centered）の授業より学習者中心型（learner-centered）の授業が授業の成果を生み出すことと指摘している。この授業の成果とは、学生のコミュニケーション能力養成において有効であることを示している。加藤（2009）は、学習者中心の英語授業形態への学生の関心の調査を行い、学習者中心の教授法が、中学、高校で学習者中心の英語教育を受けた学習者と、受けていない学習者に分け、両者の学習者中心への教授法の影響を調査した。支持の高い順に、英語のクラスでは、ゲームなどを通して行うのが好きだ（5.37）、英語のクラスでのグループ活動は、一人で問題を解いたりするより不安は減る（5.28）、英語のクラスでは、友達とコミュニケーションをとりながら学習するのが好きだ（5.09）が高く支持された。これらは学習者中心の授業形態の特徴であり、学生からは学習者中心の授業形態が支持されたと示唆された。支持の低い順は、英語のクラスでは、教師と話をするのが苦手だ（3.11）英語のクラスでは、教師が一方的に進める授業が好きだ（3.00）英語のクラスでは、グループ活動は苦手だ（3.50）であった。またこの研究で、学習者中心の英語教育を中学・高校で受けた学生の比率を調べてみると学習者中心の英語学習指導受けた学生が22名（40.8%）、受けていない学生は32名（59.2%）であった。学習者中心の英語教育を受けた学生と受けていない学生の質問紙による結果は、支持を受けた順では大きな差異はなかった。しかし全体的には学習者中心の英語教育を受けていない学生の方が学習者中心の英語教育を好むといった傾向にあることがこの研究から示唆された。金川、三崎、川島（2006）では、悪い印象を持つ

英語の授業はどのようなものであったかという学生によるアンケートでは、先生が一方的に行うだけの授業が上位であった。この結果は同著による2005年度のアンケートの結果と同様である。高橋（2003）は、学習者中心型の一形態であるグループワークを取り上げ、研究を行ったところ、グループワークの導入を支持した学生はほぼ100%であり、英語力向上にあたっては、グループワークを前期、後期とも取り入れた学生と、前期はグループワークを取り入れ、後期を従来の一斉授業形態に変えて、学期末に同じ試験を実施し、両クラスの成績を比べたところ、グループワークを取り入れた学生の英語力がグループワークを取り入れなかった学生に比べて有意に伸びていることを示した。前期、後期ともグループワークを取り入れたクラスの試験の平均点が、前期51.9、後期65.7、前期はグループワークを取り入れ、後期は一斉授業を行ったクラスの試験の平均点は、前期49.1、後期53.7であった。またこの研究では、グループワークがよいと答えた学生に、なぜグループワークがよいのか理由を述べているが、その理由として上位から、リラックスした雰囲気の中で楽しく学習が出来るからと述べられ、次に友達と協調してやれるからと述べられている。また同様に、高橋（2008）では、リラックスした雰囲気の中で、友達とあれこれ議論しながら、マイペースで問題を協力して解決していく「グループによる学習」はメンバーの学習意欲を高め、全体として授業の活性化を促す学習法であると結論付けている。

「リラックスした雰囲気での学習させる」ことはいくつかの外国語指導法（The Silent Way, Suggestopedia）の指針でもあり、Krashen のいう「情意フィルター」（affective filter）を低くするのにも役立つと述べている。Creagen（2006）が学習者中心型の発音指導を行いこの指導法の効果を調査したところ、73%の学生から好意的な意見が得られたと述べている。

3. 調査協力者

調査協力者は、首都圏の私立大学に通う2年生35名である。対象者は日本の中学・高校で英語を学んできており、英語圏に暮らした経験のあるものは含まれていない。

4. 授業方法

テキストは筆者が作成したものを使用した。半期14回の授業で3つの種類のパラグラフ（Descriptive Paragraph, Opinion Paragraph, Expository Paragraph）を作成し、提出することを課題とした。学生は、3～4回の授業で一つのパラグラフを学習し、課題を提出した。学習者中心型の授業形態を取り入れ、学生には積極的に授業に参加できるように以下の点に注意し授業を行った。

- (1) ペアワークを取り入れる。
- (2) グループワークを取り入れる。
- (3) グループディスカッションをしながら学習する。

5. データ収集

データ収集には、質問紙を使用した。質問紙はライティング授業について調査をし、学習者中心のライティング授業形態への学生の関心を調査した。学習者中心の授業形態とは、グループワーク、ペアワーク活動であり、学生同士がコミュニケーションをとりながら問

題を解決していく授業であり、各質問項目が学習者中心の授業形態の特徴となるかを留意しながら、(11項目、7段階のリカートスケール)作成した。(詳細な質問項目はAppendixを参照)。アンケートの対象者(回収できたもの)は調査協力者の35名である。アンケートは、2010年1月に大学で実施した。クラス開始時にアンケートはコースの成績評価とは一切関係せず、研究目的のものであることを断った上で、回答用紙の記入方法を示し、授業中に質問用紙と回答用紙を配布した。尚、回収率は合計100%であった。

6. 分析の方法

本研究で扱うアンケート調査項目は7段階のリカートスケールを使用し、順序尺度として扱う必要があるため、 χ^2 二乗検定ではなく t 検定が本研究の分析方法として適切と判断した。よって2群間(ライティング授業が好きな学生とそうでない学生)の質問紙による学習者中心の授業の特徴をとらえた質問紙項目の t 検定を行い、2群間のデータの平均値と標準偏差を調査した。

7. 結果

検証1 学習者中心のパラグラフライティング英語授業形態への学生の関心の調査において、質問紙の結果、高い項目は上位から順に、質問4 英語のパラグラフライティングの授業では一人で作業しながら行うのが好きだ(4.14)、質問9 英語のパラグラフライティングでは、一人で問題を解いたりするより不安は減る(3.97)、質問6 英語のパラグラフライティングでは、友達とコミュニケーションをとりながら学習するのが好きだ(3.94)であった。表1に示す。

表1. 質問紙によるアンケートの結果

項目	<i>M</i> (<i>SD</i>)
質問1 英語のライティングは好きだ	3.09 (1.63)
質問2 英語のライティングは得意だ	2.34 (1.37)
質問3 英語のパラグラフライティングの授業は、ペアワークで行うのが好きだ	3.26 (1.72)
質問4 英語のパラグラフライティングの授業では、一人で作業しながら行うのが好きだ	4.14 (1.78)
質問5 英語のパラグラフライティングの授業では、グループでディスカッションしながら学習するのが好きだ	3.31 (1.55)
質問6 英語のパラグラフライティングでは、友達とコミュニケーションをとりながら学習するのが好きだ	3.94 (1.75)
質問7 英語のパラグラフライティングでは、友達と知識の交換をしながら学習するのが好きだ	3.89 (1.73)
質問8 英語のパラグラフライティングでは、グループで問題を解決しながら学習するのが好きだ	3.57 (1.54)
質問9 英語のパラグラフライティングでは、一人で問題を解いたりするより不安は減る	3.97 (1.40)
質問10 英語のパラグラフライティングでは、クラスメートと一緒に作業を行うことでライティングの力がついたと思う。	3.51 (1.70)
質問11 英語のパラグラフライティングでは、一人で作業を行う方が、力がついたと思う。	3.83 (1.58)

次に検証 2 のライティング授業が好きな学生とそうでない学生にわけ、両者の学習者中心への教授法の影響を調査した質問紙の結果は、ライティングが好きな学生と嫌いな学生の比率を調べてみると、ライティングが好きな学生は 9 人 (26%)、嫌いな学生は 20 人 (57%) で、どちらでもないは 6 人 (17%) であった。ライティングが好きな学生の質問紙の結果は、上位から質問 4 英語のパラグラフライティングの授業では一人で作業しながら行うのが好きだ (5.11)、質問 7 英語のパラグラフライティングでは、友達と知識の交換をしながら学習するのが好きだ (4.89)、質問 6 英語のパラグラフライティングでは、友達とコミュニケーションをとりながら学習するのが好きだ (4.48) であった。ライティングの嫌いな学生は、質問 4 英語のパラグラフライティングの授業では一人で作業しながら行うのが好きだ (3.95)、質問 9 英語のパラグラフライティングでは、一人で問題を解いたりするより不安は減る (3.6)、質問 11 英語のパラグラフライティングでは、一人で作業を行う方が、力がついたと思う (3.5) であった。表 2 に示す。

最後にライティングの好きな学生と嫌いな学生の質問紙の各項目において、差があるかどうかを検討するために t 検定をおこなった。有意に差があったものは、質問 2 (英語のライティングは得意だ)、質問 6 (英語のパラグラフライティングでは、友達とコミュニケーションをとりながら学習するのが好きだ)、質問 7 (英語のパラグラフライティングでは、友達と知識の交換をしながら学習するのが好きだ) であった。なお、その他の項目については有意な差はみられなかった。

表 2. 質問紙によるアンケートの結果

項目	ライティング が好きな学生	ライティング が嫌いな学生	全体	変化量	t	p
質問 1 (SD)	5.22 (0.44)	1.85 (0.81)	3.09 (1.63)	3.37 (.37)	1.6	2.56378E-12
質問 2 (SD)	3.67 (1.32)	1.5 (0.61)	2.34 (1.37)	2.17 (.71)	6.12	7.7E-07
質問 3 (SD)	3.44 (1.42)	2.74 (1.69)	3.26 (1.72)	.7 (.27)	1.22	0.11604
質問 4 (SD)	5.11 (1.27)	3.95 (1.93)	4.14 (1.78)	1.16 (.66)	1.64	0.056135
質問 5 (SD)	3.33 (1.41)	3.1 (1.52)	3.31 (1.55)	.23 (.11)	0.39	0.34957463
質問 6 (SD)	4.48 (0.67)	3.4 (2.01)	3.94 (1.75)	1.08 (1.34)	1.99	0.028419
質問 7 (SD)	4.89 (1.05)	3.2 (1.82)	3.89 (1.73)	1.69 (.77)	2.58	0.00791
質問 8 (SD)	4 (1.22)	3.2 (1.77)	3.57 (1.54)	.8 (.55)	1.23	0.115142
質問 9 (SD)	4.44 (1.01)	3.6 (1.43)	3.97 (1.40)	.84 (.42)	1.59	0.06126765
質問 10 (SD)	3.78 (1.64)	3.1 (1.8)	3.51 (1.70)	.68 (.16)	0.96	0.172531
質問 11 (SD)	4.44 (1.01)	3.5 (1.88)	3.83 (1.58)	.94 (.87)	1.41	0.085024

注：有意水準 5 %とした両側検定

8. 考察

本研究は、学習者中心型のパラグラフライティング英語授業形態への学生の関心の調査、ライティング授業が好きな学生とそうでない学生にわけ、両者の学習者中心への教授法の影響を調査したものである。

まず本研究の第 1 目的である学習者中心型のパラグラフライティング英語授業形態への

学生の関心の調査という点では、高い項目は上位から順に、質問 4 英語のパラグラフライティングの授業では一人で作業しながら行うのが好きだ (4.14)、質問 9 英語のパラグラフライティングでは、一人で問題を解いたりするより不安は減る (3.97)、質問 6 英語のパラグラフライティングでは、友達とコミュニケーションをとりながら学習するのが好きだ (3.94) であった。ライティングというのはもともと一人でやるものであり、中学、高校の英語ライティング学習は、一人でおこなってきたものが多い。ライティングの学習は一人でおこなうものが当然のことと学習者が思い込んでいるものと想定され、そういう観点からこの項目が高い結果がでたのは否定できない。次の質問 9 に注目したい。英語のパラグラフライティングでは、一人で問題を解いたりするより不安は減るという結果は、「リラックスした雰囲気で学習させる」ことはいくつかの外国語指導法 (The Silent Way, Suggestopedia) の指針でもあり、Krashen のいう「情意フィルター」(affective filter) を低くするのに役立つと述べている。これは、高橋 (2008) のリラックスした雰囲気の中で、友達とあれこれ議論しながら、マイペースで問題を協力して解決していく「グループによる学習」はメンバーの学習意欲を高め、全体として授業の活性化を促す学習法であると結論付けているものを示唆されたものである。支持の高かった項目質問 9 英語のクラスでのグループ活動は、一人で問題を解いたりするより不安は減るとともにを考慮すると、学生は、学習者中心型の授業形態であるグループ学習を高く支持していると示唆されるであろう。最後に質問 9 を検討すると、われわれ教師は、学習者に不安を不えず、英語の指導を行うよう英語学習環境を整える必要があると考えられる。Krashen 等 (Krashen & Terrell, 1983) は、言語習得における情意フィルター (Affective filter) の重要性を指摘し、学習者の動機が低いとき、過度に緊張しているとき、学習に不安を感じているときなど、この情意フィルターは高くなり、言語習得が妨げられるのだと考えられている。情意フィルターが低いほどたくさんの量のインプットが可能になるならば、教師は授業において情意フィルターを出来るだけ下げなければならない。つまり内気な生徒に強制的に大勢の前で話させたり、発音の誤りを笑ったりしない、といったことではないであろうか。よりよい英語学習環境のためにも学習者参加型のグループワークやペアワークを英語の指導に取り入れ、学習者に不安を不えない授業の展開を教師は心がけるべきだと考えられる。

次に検証 2 のライティング授業が好きな学生とそうでない学生にわけ、両者の学習者中心への教授法の影響を調査した質問紙の結果は、ライティングが好きな学生と嫌いな学生の比率を調べてみると、ライティングが好きな学生は 9 人 (26%)、嫌いな学生は 20 人 (57%) で、どちらでもないは 6 人 (17%) であった。ライティングが好きな学生の質問紙の結果は、上位から質問 4 英語のパラグラフライティングの授業では一人で作業しながら行うのが好きだ (5.11)、質問 7 英語のパラグラフライティングでは、友達と知識の交換をしながら学習するのが好きだ (4.89)、質問 6 英語のパラグラフライティングでは、友達とコミュニケーションをとりながら学習するのが好きだ (4.48) であった。ライティングの嫌いな学生は、質問 4 英語のパラグラフライティングの授業では一人で作業しながら行うのが好きだ (3.95)、質問 9 英語のパラグラフライティングでは、一人で問題を解いたりするより不安は減る (3.6)、質問 11 英語のパラグラフライティングでは、一人で作業を行う方が力がついたと思う (3.5) であった。両者とも質問 4 英語のパラグラフライ

ティングでは一人で作業しながら行うのが好きだが高い質問項目であった。次に高い質問項目が、ライティングが好きな学生は質問項目7 英語のパラグラフライティングでは、友達と知識の交換をしながら学習するのが好きだ、嫌いな学生では、質問項目9 英語のパラグラフライティングでは、一人で問題を解いたりするより不安は減るであった。この結果は、ライティングの嫌いな学生は、ライティング活動を不得意と認識しており(1.5 (0.61)), 一人で問題を解いたりするより友達と作業をすることは不安が減ると感じているのである。

最後にライティングの好きな学生と嫌いな学生の質問紙の各項目において、差があるかどうかを検討するために t 検定をおこなった結果、有意に差があったものは、質問2 (英語のライティングは得意だ)、質問6 (英語のパラグラフライティングでは、友達とコミュニケーションをとりながら学習するのが好きだ)、質問7 (英語のパラグラフライティングでは、友達と知識の交換をしながら学習するのが好きだ)であった。なお、その他の項目については有意な差はみられなかった。質問項目2 (英語のライティングは得意だ)というアンケート結果は、ライティングの好きな学生が、ライティングが得意だとアンケートで答えるのは当然の結果であり、またライティングが嫌いな学生が、ライティングが得意ではないと答えるのも当然の結果である。次に質問項目6 (英語のパラグラフライティングでは、友達とコミュニケーションをとりながら学習するのが好きだ)というアンケート結果は、ライティングが好きな学生は、少なからず嫌いな学生よりライティングが得意だと感じており、その結果、気持ちの余裕から友達との共同作業を好むという結果になってのではないだろうか。質問7 (英語のパラグラフライティングでは、友達と知識の交換をしながら学習するのが好きだ)が有意な差がでたのも同じ理由と考えられる。

9. まとめ

本研究では、学習者中心のパラグラフライティング英語授業形態への学生の関心の調査をし、高い項目は上位から順に、質問4 英語のパラグラフライティングの授業では一人で作業しながら行うのが好きだ(4.14)、質問9 英語のパラグラフライティングでは、一人で問題を解いたりするより不安は減る(3.97)、質問6 英語のパラグラフライティングでは、友達とコミュニケーションをとりながら学習するのが好きだ(3.94)という結果となった。また、ライティングの授業が好きな学生とそうでない学生にわけ、両者の学習者中心への教授法の影響を調査したところ、ライティングが好きな学生は9人(26%)、嫌いな学生は20人(57%)で、どちらでもないは6人(17%)であり、ライティングが好きな学生と嫌いな学生の質問項目の高い順を調査したところ、大きな差はなかった。最後にライティングの好きな学生と嫌いな学生の質問紙の各項目において、差があるかどうかを検討するために t 検定をおこなった結果、有意に差があったものは、質問2 (英語のライティングは得意だ)、質問6 (英語のパラグラフライティングでは、友達とコミュニケーションをとりながら学習するのが好きだ)、質問7 (英語のパラグラフライティングでは、友達と知識の交換をしながら学習するのが好きだ)であった。これは、ライティングが好きな学生は、ライティングが得意だと感じているところもあり、ライティングの嫌いな学生より友達と作業を進める学習者中心型の授業形態を好むものと示唆された。

最後に、本研究の限界点として、以下の2点を指摘しておく。

第1は、本研究は量的データによる分析での教授法が外国語学習者に与える影響について検討することを目的としたため、教授法が他の要因の影響を受けている可能性を否定することはできない。今後は、インタビューなどの質的アプローチでデータ収集による精緻な分析とあわせて、学習者中心型の指導法と学習の進展度やテスト結果との関係を明らかにする必要がある。

第2に、次に、本研究は調査協力者の数が極めて限られた研究である。今後も更なる調査を重ねることで、学習者中心型の調査の結果の一般化可能性を深めていく必要がある。

参考文献

- 大井恭子 (2008a) 思考力育成の試み—中学生の英語ライティング指導を通して母語をも抱合したマルチコンピテンス涵養のための英作文指導に関する研究 pp.7-16
- 大井恭子編著, 田畑光義, 松井孝志 (2008b) 「パラグラフ・ライティング指導入門—中高での効果的なライティング指導のために」大修館書店
- アラン M. コーゲン, 平木隆之 (2001) 「社会的能力開発のための小人数グループ学習」北海道東海大学紀要. 人文社会科学系第14号 pp.167-183
- 稲垣佳世子, 波多野諠余夫 (2007) 「人はいかに学ぶか」東京：中央公論新社
- 加藤澄恵 (2010) 「日本人大学生における「学習者中心型の英語教育」についての一考察：英語授業の改善にむけて」言語文化論叢
- 金川由紀, 三崎リン, 川島紀美 (2006) 「学習者中心概念に基づく平安女学院大学でのカリキュラムへの一考察」平安女学院大学研究年報第7号 pp.33-45
- 高橋寿夫 (2003) 「授業の改善に向けて：グループ・ワークによるリーディング指導」外国語教育研究第6号 pp.39-51
- 高橋寿夫 (2008) 「授業の活性化に向けて—グループによる学生参加型授業の実践的考察」『関西大学外国語教育研究フォーラム—7号—』 pp.23-34
- Deller, S (1990) *Lessons from the Learner* Harlow: Longman.
- Harry E. Creagen (2006) *The Learner-Centered/Communicative Paradigm In Pronunciation Teaching*. Language and culture 64 pp.71-88
- Illich, I (1972) *Deschooling Society* Hammonds Worth, Middlesex: Calder&Boyars.
- Krashen, Stephen D. and Tracy D. Terrell. 1983. *The natural approach: Language acquisition in the classroom*. Hayward, CA: Alemany Press.
- Tudor, I (1996) *Learner-centredness as Language Education* Cambridge: Cambridge University Press.

Appendix

以下の基準で、該当する数字を○で囲んでください。

1	2	3	4	5	6	7
まったく ちがう	ちがう	やや ちがう	どちら でもない	ややその とおり	そのとおり	まったく そのとおり

- 1 英語のライティングは好きだ
(1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 ・ 6 ・ 7)
- 2 英語のライティングは得意だ
(1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 ・ 6 ・ 7)
- 3 英語のパラグラフライティングの授業は、ペアワークで行うのが好きだ
(1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 ・ 6 ・ 7)
- 4 英語のパラグラフライティングの授業では、一人で作業しながら行うのが好きだ
(1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 ・ 6 ・ 7)
- 5 英語のパラグラフライティングの授業では、グループでディスカッションしながら学習するのが好きだ
(1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 ・ 6 ・ 7)
- 6 英語のパラグラフライティングでは、友達とコミュニケーションをとりながら学習するのが好きだ
(1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 ・ 6 ・ 7)
- 7 英語のパラグラフライティングでは、友達と知識の交換をしながら学習するのが好きだ
(1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 ・ 6 ・ 7)
- 8 英語のパラグラフライティングでは、グループで問題を解決しながら学習するのが好きだ
(1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 ・ 6 ・ 7)
- 9 英語のパラグラフライティングでは、一人で問題を解いたりするより不安は減る
(1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 ・ 6 ・ 7)
- 10 英語のパラグラフライティングでは、クラスメートと一緒に作業を行うことでライティングの力がついたと思う。
(1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 ・ 6 ・ 7)
- 11 英語のパラグラフライティングでは、一人で作業を行う方が、力がついたと思う。
(1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 ・ 6 ・ 7)

〔抄 録〕

大井（2008）は、「書くこと」は、学習者の「考える力」を高める「知的訓練」であり、また、習得の途上にある英語学習者にとっては、他の技能（「読む」「話す」「聞く」）の上達にも大きく寄与する力と指摘する。本研究は、授業形態が外国語学習者のライティング能力に与える影響についてを検討した。具体的には、学習者中心の英語授業形態が学生の英語ライティング能力向上に与える影響についてを調査した。検証1．学習者中心のパラグラフライティング英語授業形態への学生の関心の調査、検証2 ライティング授業が好きな学生とそうでない学生にわけ、両者の学習者中心への教授法の影響を調査した。質問紙の結果から、パラグラフライティングの授業では、一人で問題を解いたりするより不安は減る、友達とコミュニケーションをとりながら学習するのが好きだという項目が高く支持された。